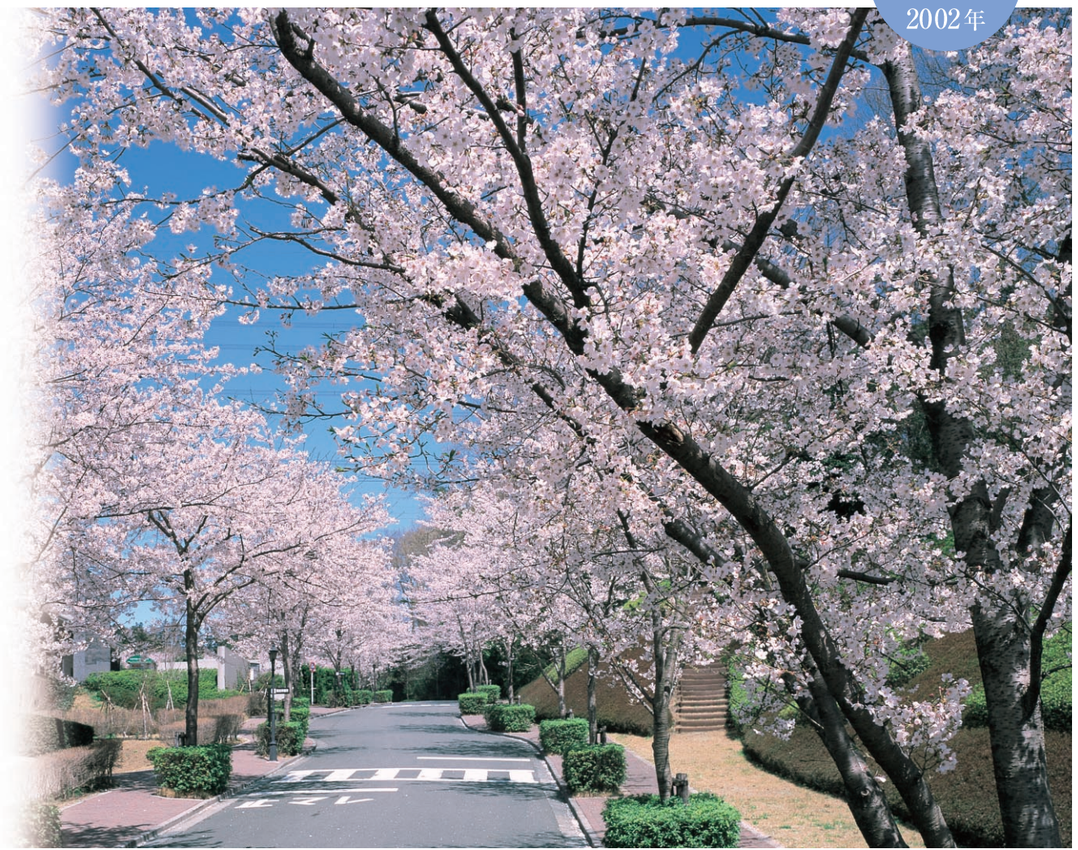
こころの園

—町田の丘の都市型公園墓地—

東京多摩霊園通信 vol.2 2002年



園内に続く桜並木

都心から40分。便利な交通アクセス

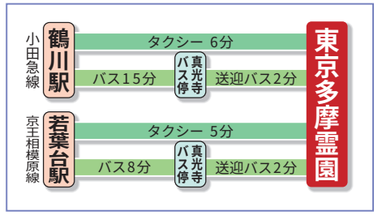
電車をご利用の方は……
小田急線《鶴川駅》
京王相模原線《若葉台駅》が便利です。

●鶴川駅から神奈中バス停1番
（若葉台駅行：真光寺バス停下車徒歩8分）

●若葉台駅から神奈中バス
（鶴川駅行：真光寺バス停下車徒歩8分）

無料送迎バス運行
《真光寺バス停より2分》

真光寺バス停から霊園まで、無料送迎バスを運行しております。お気軽にご利用ください。



東京多摩霊園

〒195-0051 東京都町田市真光寺202（開門9:00～閉門17:00）

お問い合わせ・お申し込みは── 東京多摩霊園 管理事務所 までどうぞ。

0120-36-1236

霊園だより

ごあいさつ

おかげさまで、この東京多摩霊園にも新しい年の若葉の季節がまいりました。皆さまにおかれましてもお健やかなことと存じます。

近年、東京圏近郊に多くの霊園が造られています。ところが監督省の厚生労働省は、霊園開設の許可権をもつ地方自治体に対して再々通達を発しています。霊園を運営する事業主体は公益を優先するための、長期的に健全な運営を目的とした財務内容を備えていることが必要で、名義だけ宗教法人の名を用いて、明らかにビジネス優先の事業として開発される計画を排除するよう指摘しています。

東京多摩霊園を末永く運営する立場で感じますことは、「霊園の真価とは、数十年先の孫子の代になってこそ顕在化する」ということであります。

私達東京多摩霊園は「うちのおじいちゃん達は、賢明で良いところにお墓を残してくれた。」と皆様方のご家族に評さることを目標に、不断の努力を続けてまいる所在であります。

管理棟：常に職員が待機しておりますので、ご用の際はお気軽にお越しください。

園内カート：お年寄りやお子様とご一緒の方のために、カート（4人乗り）でお参りができます。

ゆとりの車道：道幅6mの車道は、直接お車を墓所近くに付けられるよう配慮されています。

ロビー：お参りが済みましたらご休憩ください。お茶もご用意しております。

あずまや：園内に何カ所も点在するあずまやは、ご休息にご利用ください。

日本庭園：お参り後は、お弁当などご家族団らんのひとときにぜひご利用ください。

園内通路：入り口から園内に500m続く並木道。四季折々の花木が風情を楽しませてくれます。

生花販売：お彼岸・お盆には、墓前の献花にお花を販売しております。管理棟ではお線香もご用意しております。

水場・手桶：お参りしやすいよう、墓所近く、園内各所に水汲み場を設けてあります。

やすらぎの霊園のための環境づくり

東京多摩霊園では、供養の心を育む、自然の恵みを活かした霊園づくりを心がけています。

開園以来の懸案でございました、霊園を横切る送電線の問題も、平成10年には鉄塔の移設工事により解消することができました。工事期間中にはご不便をおかけいたしましたが、皆さまのご理解とご協力により、無事完了いたしましたこと、たいへん喜ばしく存じます。

また、当園ではこうした霊園整備に際しましても、元々この地に自生していた木々や草花の、小さな命をも大切にしています。

美しき旅立ち ―エッセイ②―

主人と二人で眠る墓

阿木 燿子

先日、近くの寺から封書が届いた。別に檀家でもないのに、何だろう、と思って開けてみたら、墓地の販売についてのDMであった。今までならサッと目を通して、ゴミ箱に投げ入れるのだが、その時は何故か、保管しておく気になった。

その寺は、私が毎日通る道の途中にある。赤坂九丁目の自宅から、一ツ木通りの事務所まで、寺の前を通過しなければ行けない。境内に入ったことがないので、奥に分譲中のお墓があることを知らずにいた。

チラシを読むと起源も古く、由緒正しい寺のようである。DMを捨てなかったのは、私達夫婦が死んだ後、自宅のすぐ近くで永眠するのも悪くないな、と思ったからである。近ければ、事務所のスタッフや近所の人達に、墓参りに来て貰える。それに赤坂は都会なので、賑やか好きな私達には合っている、そう思ったのだ。

その夜、主人にDMを見せて、話をした。そんなことを考えるのは、まだ早いよ、と言われそうだなと思ったが、予想に反して彼は、嫌に真面目な顔でこう言った。

「ほら、前に話しただろう。京都の伏見の若いお坊さんの話。僕が仕事で京都の寺巡りをした時、出会ったお坊さんさ。二十歳になったとかで、この間、葉書をくれたんだ。住職になったんだって。彼のおじいさんがそこの住職だったんだけど、お父さんとお兄さんがサラリーマンになってしまったんで、高校生になってすぐ、寺を継いで欲しいって、言われたらしい。それで悩んだ末、僧侶になる決心をしたんだって。僕が会った時は、まだ十七歳だったけど、目が澄んでいて、今時珍しく、清々しい感じの少年でさ。その時、朝の勤行に参加させて貰ったんだが、お経を読む声があまりに素晴らしくて、思わず聞き惚れてしまって……。こんな爽やかな声で、お経を読まれたら、どんな霊でも浮かばれるなって、思ってさ」

そうだ、確かにその話なら聞いたことがある。テレビの取材で京都を訪れた際、主人はその少年僧と出会った。境内には若冲が描いた五百羅漢が並べられ、落ち着いた感じのお寺だったらしい。主人が話してくれた、そんなことを思い出しながら、私はこう答えた。

「そうね、長閑な景色の中で、二人で仲良く眠るのも、悪くないかもね」と。

「それに彼が若いのも良いよ。何たって、やっと二十歳になったばかりなんだから。そこにお墓を作れば、ずーっと彼に護って貰えるし、何か安心して死ねる感じがするよね」と主人も言う。

その言葉に頷きながら、私は頭の中に様々な表情をした五百羅漢像を思い浮かべる。朝の勤行をしている髭剃り後も初々しい、若い住職の姿も浮かんでくる。

思えば私は四十代までは、自分のお墓について考えたことがなかった。死はいつか来るものだとは思っていても実感がなく、日々の雑事に追われているうちに、あっと言う間にこの年になってしまった。

しかし、五十代も半ばになると、さすがに人の命には終りがあるのだな、と思うことが増えてくる。とくに親類や友人の葬式に参列すると、死が身近になる。そして、そろそろお墓を準備しておかなきゃ、と思うのである。

一昔前までは、女性は嫁に行けば嫁入り先のものとなり、よほどのことがない限り、実家には戻れなかった。離婚をして出戻った場合は、肩身の狭い思いを強いられた。

でも、今ではバツ一という、軽い言葉に象徴されるように、たとえ旧姓に戻っても、世間から後ろ指さされることはない。

私が結婚した頃は、まだまだ女性の地位は不安定なもので、結婚したら婚家の家の家風に従うべき、というような風潮が残っていた。

私が主人からプロポーズされた時、最初に考えたことは、あー、これで私は父や母の眠るお墓には入れないんだな、ということだった。そう思ったらセンチメンタルな気分に陥り、悲しくなったのを覚えている。

彼のことを心から愛し、信頼していても、何だか淋しい。結婚をするということは、それまで育ててくれた親から離れて、夫となるべき人と力を合わせて生きてゆくことだ。そして、嫁ぎ先の家の墓に骨を納めることでもある。もちろんそのことは頭では理解していた。それでも妙に感傷的になる私がいた。

人間、死んでしまったら、自分の骨が何処に納められようが、本人には自覚がない。だから、どうでもいいようなのもだが、お墓にこだわる人は決して少なくないはずだ。

舅と姑は明治生まれの気骨のある人達だったが、二人はまだ元気な頃に、自分達の墓を購入していた。結婚前、主人の家に遊びに行った時、私達が死んだら、ここに入るんですよ、と姑が墓地のカタログを広げ、話してくれたことを覚えている。冗談が好きで、豪快な舅とは対照的に、姑は生真面目な女性だった。その姑が嬉しそうだったのが、印象に残っている。何事にもきちんとしていた姑らしく、お墓を買ったことで、自分達の行く末に対して、安心したのだろう。

死は誰にでも、いつかは必ずやってくる。だから、その準備をするのに、早過ぎることはない。ひとつは心の問題として覚悟をしておくこと、また、いつその日がきてもいいように、身辺の整理をすること。そして、死後霊が彷徨うことがないように、お墓を整えておくことも、大事な気がする。

この年になると死は絵空事ではなく、現実味を帯びてくる。ならば、お墓は新しい方が良い気がする。先祖代々続くお墓はもちろん大切にしなければいけないが、許されるなら、私達夫婦のために新しいお墓を作りたい。二人が歩んだ足跡がさり気なく刻まれた、小さなお墓でいいから。共に生きた証しに、家というより個人と個人の結びつきを印したものの方が、私達の心にはフィットする。

その時、馴染み深い自宅の近くにするか、表情豊かな五百羅漢に囲まれて眠るか、はたまた別の場所にするか、主人と一緒なら何処でもいいとは思うが、墓について考える時、私の頭の中を様々なイメージがよぎっていく。

◆◆◆◆◆

阿木 燿子 あき ようこ

作詞家。横浜市出身。
宇崎竜童と結婚後、彼が率いるバンド『ダウン・タウン・ブギウギ・バンド』のために書いた曲、「港のヨーコ・ヨコハマ・ヨコスカ」で作詞家としてデビュー。その後、山口百恵の曲を宇崎と共に、作詞・作曲し、山口百恵の黄金時代を支える。
近年は、小説やエッセイも手懸ける。
最近の著者はエッセイ集「大人になっても忘れたくないこと」（PHP文庫）。

ひとくちメモ

寿陵【じゅりょう】

生前にお墓を購入することを、「寿陵」と言い、古来よりおめでたいこととされています。これは、日本のお墓のルーツが「仏塔」だったことに由来しています。お墓の準備は仏塔を建てることでもあり、「生前に仏事を修める」という縁起の良い意味があるのです。
現在では、善き旅立ちを願う仏塔というより、思い出の碑としての意味の方が強く、思いにかなったお墓にしたいというお気持ちから寿陵を考える方が多くなりました。いずれにせよ、お墓は一生以上の財産です。受け継いでゆく方々にとっても、心やすらぐものを遺したいものです。

ご法事について

一般的に、追善のご法事は祥月命日かそれ以前の日取りで行うようにします。
神式(ねん祭)ですと、故人の誕生日か命日に行います。
それぞれ節目となる年回は次の表でご確認ください。

平成十四年　年回表

ご法事（仏教）

一周忌	平成十三年没	二十三回忌	昭和五十五年没
三回忌	平成十二年没	二十七回忌	昭和五十一年没
七回忌	平成八年没	三十三回忌	昭和四十五年没
十三回忌	平成二年没	三十七回忌	昭和四十一年没
十七回忌	昭和六十一年没	五十回忌	昭和三十六年没

年祭（神道）

一年祭	平成十三年没	二十年祭	昭和五十七年没
三年祭	平成十一年没	三十年祭	昭和四十七年没
五年祭	平成九年没	五十年祭	昭和二十七年没
十年祭	平成四年没	百年祭	明治三十五年没

礼拝堂・会食室のご利用の際はご予約をお願いします。

皆さまにお使いいただける礼拝堂・会食室をご用意しています。
ご利用の際は、早めにご予約をお願いいたします。お食事のご注文は一週間くらい前までに。
人数等の多少の変更は前日の午前中までお受けいたします。

礼拝堂使用料（使用時間45分）

1ルーム（約25名）……10,500円
追加1ルーム……　5,250円
※消費税込み

会食室使用料（使用時間1時間30分）

1ルーム（約10名）……　5,250円
2ルーム（約20名）……10,500円
3ルーム（約30名）……15,750円
※消費税込み

各宗派のご法事をお世話いたします。

当園は宗旨・宗派に関わりなくご利用いただける霊園です。皆さまのお付き合いされているお寺様など、どなたでもお出入りしていただけますが、お近くにお心当たりの寺社のない方々には、当園でご法事のための各宗派寺社の僧侶をご紹介いたします。管理事務所までお問い合せください。

ご法事　諸費用ご案内

埋葬料	35、000円
墓前追善供養ご準備	
仏式	経机一基（清掃料含む）　15、750円
神式	祭壇一基（清掃料含む）　21、000円

※消費税込み

手続きのお願い

住所変更されたとき、墓所を継承されたときなどは、所定の手続きが必要になります。早めに管理事務所にご連絡いただけるようお願いいたします。

❶住所変更（表示・本籍地も含む）／氏名変更されたときはすぐお届けください。（そのままですと、お知らせなどが届きにくくなります）

ご用意いただくもの
■使用承諾書
■住民票一通
■認め印

❷墓所を継承されたときは使用承諾書の書き換えをしてください。

ご用意いただくもの
■使用承諾書
■同意書
■承諾者の戸籍謄本及び住民票各一通
■認め印

❸使用承諾書を紛失されたときは再交付の手続きをしてください。

ご用意いただくもの
■住民票一通
■認め印

❹お骨を埋葬されるときは埋葬手続きを行ってください。

ご用意いただくもの
■火葬許可証
（市町村役場発行のもの）
■使用承諾書
（現使用者が亡くなられたときは、名義変更が必要です）
■認め印

❺その他
主な手続きに関し、ご案内申し上げました。お留め置きください。
お参りにおいでの時でも、お電話でも結構です。ご用向きの際は管理事務所までお声をかけてください。
詳しいしきたりなどについては、こちらでご説明申し上げます。法要のご手配、改葬・分骨などのご相談も承ります。なお、お手続きの際には事務手続料を申し受けます。

お気軽に、管理事務所までどうぞ。

東京多摩霊園では、管理の行き届いた気持ちのよい霊園を皆さまにご利用していただくことを願っております。皆さまにご不便の無いよう、管理事務所には職員が常駐しておりますので、お気軽にお声をおかけください。
お参りの後などには、ゆっくりしていただけるようお茶のご用意もございます。
また、各種お手続きや、ご法事のお手配などはお電話でもお受けしております。
こちらもお気軽にご利用ください。